金色不動明王画像に関する一考察

名古屋大学 見田 隆鑑
MITA Takaaki

金色不動明王画像（以下：本像）は、円珍（814～891）が感得した不動尊を描いた画像とされ、園城寺に伝わる根本像は円珍が帰朝した天安 2 年（858）以降、9 世紀後半の制作とされている。従来、円珍の感得体験や諸説話と本像の関係が考察される他、佐和隆研氏をはじめ、本像と共通点を持つ図像が探索され、円珍が本像を描かせる拠所となった可能性のある幾つかの図像が提示されてきた。一方、泉武夫氏は、『些些疑文』や『上智慧輪三蔵書』の記述から、本像の原形が中国に存在した可能性を指摘され、制作時期を『些些疑文』を撰した元慶 6 年（882）から『円珍伝』の編まれた延喜 2 年（902）の間とされた。また、2005 年には柳澤孝氏の遺稿が活字化されたことで、根本像を唐画とする見解も示され、泉氏と同様に智慧輪と円珍の交流に本像が園城寺に伝わった経緯があることが指摘された。中国における同時代の比較作例がないことや、『上智慧輪三蔵書』の返書が不明なことから確証は提示できないが、発表者も本像の祖本が中国に存在したという立場から今回の解釈を試みる。

その理由には、①『些些疑文』等から窺える円珍の不動儀軌の理解や疑問追求の姿勢からは、経軌に典拠のない「魁偉奇妙」と表現される本像を、円珍自らが自身の感得像として作画させるとは考え難く、当初、円珍あるいはその弟子が本像を重視した理由も、智慧輪から授かった尊像であることに、経軌の規定を越えて本像の意味が見出されたからではないかと考えられる点、②三善清行『円珍伝』をもとに“虚空を踏む”と解釈される表現も、請来された画像にもともと火焔光背・台座が描かれていなかった可能性が考えられ、同時に本像では敢えて岩座を表さないことにもその意味が見出せる点、③装身具のうち、特に両腕足釧に鈴を表す例は他に類を見ず、感得像としてこの表現を取り入れる理由も不明である点などがあげられる。

本発表では、本像を円珍の感得像ではなく、円珍入寂以降、『円珍伝』撰述までに感得説話と結びついた尊像と位置づけた場合、本来、一尊様としてどのような性格を持つ不動尊であったのかという問題に対し、辮髪を表さない巻髪、両目開眼・上出牙を表す正面向きの忿怒相、身色、立像で表された点など、各表現の意味を再検討するとともに、『大日経疏』息障品第三の観想法、及び『円珎疑問』に見られる「金剛界不動尊」や「大自在を降伏する不動尊」の解釈も考慮し、当初は煩悩を降伏する際の不動尊の姿を表現した画像であった可能性を指摘する。また、本考察にあたり、上出牙を表す不動明王の解釈、巻髪表現の受容の背景なども視野に入れた一試論を提示する。

なお、根本像は秘仏であることから、本発表では『秘仏金色不動明王画像』（朝日新聞社、2001）に公刊された写真資料及び安嶋紀昭氏の調査報告・研究成果を踏まえ、特に図像面からの考察に限ることを予めお断りする。